JSPS Stockholm Newsletter

Vol. 50

Prologue 01 ストックホルム赴任にあたって/退任のご挨拶
着任のご挨拶/産休のお知らせ

News 03 スウェーデン同窓会幹部会の開催/IVA-JSPSセミナーの開催/フィンランド同窓会幹部会開催/在スウェーデン日本人研究者の会開催/JSPSサマープログラム プレオリエンテーション開催

Reports 05 Japan Alumni and Researcher Assembly 2016に参加して/ケニア・ビクトリア湖島嶼におけるマラリア撲滅プロジェクト/その他打合せ・来会等/コラム～スカンジナビア初、陸地でのヒラマサ養殖～

Academic Information 10 スウェーデン：豊島近教授及びPoul Nissen教授がグレゴリー・アミノフ賞を受賞/スウェーデン：ノーベル賞2016発表日程の決定/スウェーデン：スウェーデンの主要3大学ノーベルセンターに応用研究施設設置を計画/スウェーデン：バーバラ・キャノン前王立科学アカデミー会長が旭日重光章を受賞/スウェーデン：卒業生の雇用について/フィンランド：教育予算の削減について/フィンランド：FinCEAL Plus INFOBANK機能について/ノルウェー：日諾間でアルミ合金における共同研究教育事業締結/デンマーク：デンマーク工科大学（DTU）における廃水分析プロジェクト/KI Bladet

Notice 16 イベント予定/事業のご案内
カロリンスカ医科大学（Karolinska Institutet）同窓会会員募集
JSPS Stockholm Newsletter 定期購読

ストックホルム赴任にあたって – 時の流れを遅く感じる日々への期待

JSPSストックホルム研究連絡センター長　津本　忠治

年を取ると時の流れを早く感じることは国籍や人種のいかんを問わず多くの人に起きることのようである。“あっという間に、1年が過ぎてしまった”と嘆くお年寄りは多いが、若い人からはそのような嘆きはあまり聞かない。小生を含め多くの人の説明では、新しく蓄積される記憶（特に新しい体験によるエピソード記憶）の量が時の流れの感覚の遅速を決めているとのことである。つまり、若い時（特に青少年期）はほぼ全てが新しい体験であり、時によっては何らかの感動を伴うことが多い。そのようにして、若い時は多くの新しい記憶が蓄積されるが、年齢を重ねると新規な、或いは感動をともなう体験が少なくなり、記憶の蓄積が少なくなるため振り返ってみると時の流れを早く感じるというものである。最近の脳科学では、エピソード記憶の保持は強い喜びや悲しみのような情動によって強化されるという。つまり、新しい体験に基づく感動を伴うエピソード記憶が多ければ時の流れを遅く感じ人生を長く感じることになる。

以下、小生の個人的体験であるが、1976年より北ドイツのゲッティンゲンという小都市で暮らした30歳代の2年間を非常に長く感じている。その後、米国西海岸のバークレイに1年弱、金沢に約7年、大阪に約20年、東京に約10年以上住んでいるが、やはり中年から老年にかけて住んだ大阪や東京における時の流れはあっという間に過ぎ去ったという印象であり、北ドイツ時代の数倍以上の年月を過ごしたとはとても思えない感じである。

翻って、これも小生の個人的問題であるが、本年5月1日よりストックホルム研究連絡センター長をJSPSより委嘱され初めての地で暮らすこととなった。ストックホルムではどのような生活が待っているのか期待と不安の交錯した気持ちであるが、今までにない新しい体験が多く待ち構えていることは間違いなさそうである。上記の説が正しければ、時の流れを遅く感じるであろう。或いは、そうではなくて、新規な体験の多少に関係なく単に年齢だけで決まるとすればあっという間に任期が過ぎてしまうであろう。果たして、ストックホルムでの生活は時の流れが遅くなり濃密な記憶に満ちた期間となるのか、或いは大阪や東京時代のように瞬く間に過ぎてしまうのか、個人的ではあるが上記仮説を検証する心躍る体験になるのではとストックホルムでの新生活に密かな期待を抱いている。

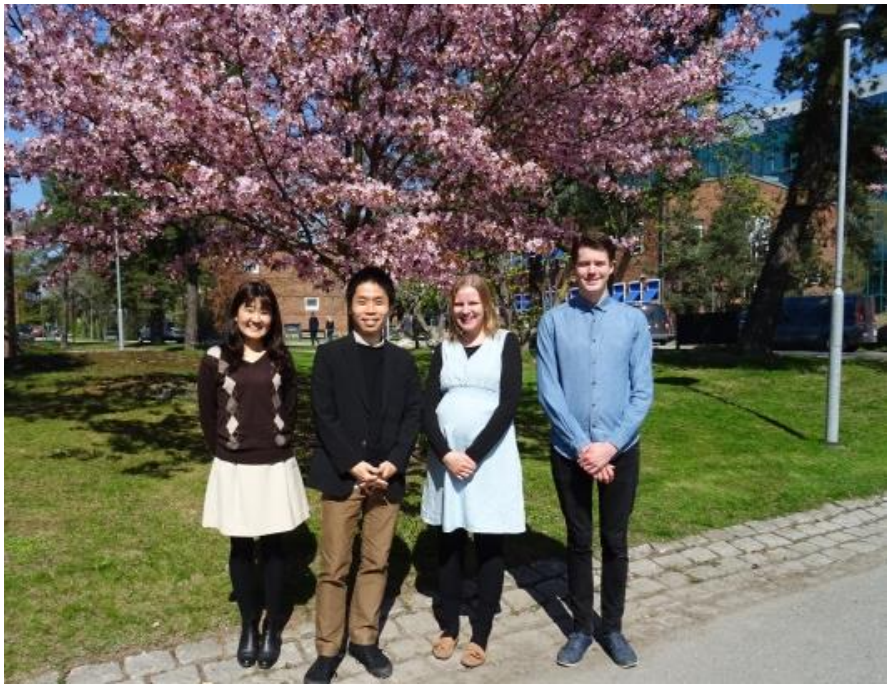
阿久津前センター長より退任のご挨拶

私こと、4月末をもってJSPSストックホルム研究連絡センター長の任期を終え、帰国することになりました。

この2年間、スウェーデンを中心とした北欧・バルト各国の学術関係者の皆様、日本の大学・学術関係者の皆様、在北欧・バルト日本国大使館および在住日本人研究者の皆様のご支援をいただき、日本と北欧・バルト三国の学術交流にいささかなりとも貢献できたことを幸いに思っています。個人的にはスウェーデンのあたたかい人々とすばらしい自然の中で、妻とともに有意義な時間を持つことができたことに感謝しております。

関係者の皆様のさらなるご活躍と当センターの発展を祈念しております。

2016年4月　阿久津秀雄



(左から順に)
北島江里子国際協力員、中兼優介国際協力員、タシマ マリカ 現地職員、
オスカー ニルセン 現地職員

○着任のご挨拶

中兼 優介　国際協力員

ストックホルムは港町なので出身の横浜とどことなく似た雰囲気があり、快適に毎日を過ごすことができています。4月に着任してからあっという間に2か月近く経ちますが、1日1日を大切に、北欧での暮らしを充実させていければと思います。北欧諸国・バルト三国と日本との学術交流に少しで貢献できるよう努めて参りますので、これからどうぞ宜しくお願い致します。

北島 江里子　国際協力員

4月に赴任しまして、1年間当センターで国際的な研究交流の推進に尽力できればと思います。スウェーデンはこれから夏にかけてますます良い時期になってくるようですし、冬は寒いながらも美しい街並みに降る雪が芸術的と聞いていますのでとても楽しみです。今後、皆様とは講演会やセミナー等のイベントまたはこのニュースレターを通してお目にかかるかと思いますが、どうぞよろしくお願いします。

オスカー ニルセン　現地職員

初めまして。私はJSPSストックホルムセンターの新現地職員のオスカーニルセンです。私は幼い頃から言語と文学に興味を持っているので、去年の春ストックホルム大学で日本語からスウェーデン語への翻訳学の修士号を取得しました。その前にルンド大学と慶応義塾大学で日本に関する勉強もしたことがあります。これからどうぞよろしくお願いします。

○産休のお知らせ

タシマ マリカ　現地職員

JSPSストックホルム研究連絡センターで、やりがいのある、楽しい日々を過ごさせていただきました。様々なイベントにも参加させていただき、たくさんの立派な方にお会いができまして、本当にうれしく存じます。

5月末から産休に入り、初めて母親になる予定です。職場に復帰するのが2017年の10月からになっております。休暇中はご迷惑をおかけすることになりますが、皆様のご活躍をお祈り申し上げます。

スウェーデン同窓会幹部会 の開催

2016年3月4日、ストックホルム研究連絡センターにおいて、スウェーデン同窓会幹部会2016が開催された。初めに、Göran Thor JSPSスウェーデン同窓会会長による開会挨拶、阿久津センター長による歓迎挨拶、参加者自己紹介が行われた。次に、同窓会規約の確認、JSPS東京本部からの情報提供を交えながら、幹部会の目的、ストックホルムセンターとの役割分担に関して議論が行われた。その後、2016年1月に行われた同窓会10周年記念シンポジウムについて、参加者からのフィードバックがあり、2017年の活動内容について意見交換を行った。最後に、次年度の同窓会セミナーの選考、次年度予算について議論が行われた後、Elin Palm副会長の挨拶により幹部会を閉会した。

幹部会参加者集合写真

IVA-JSPSセミナーの開催

IVA-JSPSセミナーは、著名な研究業績を有する日本の研究者を招聘し、現地学術・経済関係者における日本の科学技術水準の高さへの関心喚起、当該分野における両国間の学術交流の推進等を目的とする講演会である。

2015年度2回目となる今回は、JSPSストックホルム研究連絡センター、スウェーデン王立工学アカデミー（IVA）、在スウェーデン日本国大使館、瑞日基金の共催で2016年3月21日に、スウェーデン王立工学アカデミー（IVA）において、中曽宏日本銀行副総裁を招聘し、”The Japanese Economy – Challenges and Future Perspectives” をテーマに開催した。

同セミナーでは、Mia Horn af Rantzienスウェーデン王立工学アカデミー経済部会長による歓迎挨拶、Klas Eklund SEB銀行シニアエコノミストのイントロダクションに続き、Edvard Fleetwood瑞日基金事務局長から故Robert Stenram氏への哀悼の辞が述べられた。Stenram氏は1990年代の日本の金融危機の際、Swedbank東京事務所長として日本の銀行業界との間で緊密な連携を行い、中曽副総裁とも交友があった。

続いて、中曽副総裁より”Challenges toward Financial Stability and the Policy Frontier: Unconventional Monetary Policy, Macroprudence, and Financial Institutions’ Low Profitability” と題した講演が行われた。講演後は、Stefen Ingvesスウェーデン中央銀行総裁によるコメントに続き、パネルディスカッションが行われ、同セミナーのテーマについて活発な意見交換が行われた。

中曽副総裁による講演

講演者らによる集合写真

中曽副総裁の講演に関する詳しい情報は、以下のサイトをご参照下さい。
（講演動画）IVA HP
URL：http://iva.se/event/the-japanese-economy-outlook/
（講演原稿）日本銀行HP
URL：https://www.boj.or.jp/announcements/press/koen_2016/ko160322a.htm/（和文）
：https://www.boj.or.jp/en/announcements/press/koen_2016/ko160322a.htm/（英文）

フィンランド同窓会幹部会の開催

2016年3月31日、タンペレエ工科大学にてフィンランド同窓会幹部会が開催された。ストクホルム研究連絡センターからは、阿久津センター長、川窪副センター長、タシママリカ現地職員がオンラインにて参加した。同窓会規約の修正、2016-2017年の活動計画、予算について意見交換がされた。2019年 は日本とフィンランド国交樹立100周年を迎える節目の年であるため、同年のイベント企画についても議論が行われた。幹部会・センター以外にも在フィンランド日本大使館などの関係組織とも連携の上、計画がされるべきとの意見があり、より具体的な計画については次回の会議で引続き議論されることとなった。

在スウェーデン日本人研究者の会開催

2016年4月19日、ストックホルム市内にて在スウェーデン日本人研究者の会が開催された。幹事を務める佐藤在スウェーデン日本国大使館一等書記官、川窪JSPSストックホルム研究連絡センター副センター長の呼びかけにより、スウェーデンに滞在する研究者・学生22人が参加した。冒頭、佐藤一等書記官より開会の挨拶があり、参加者全員が自己紹介を行った。その後、阿久津センター長による帰任挨拶や、着任準備のため来瑞中の津本次期センター長の挨拶、4月に着任した中兼国際協力員、北島国際協力員の挨拶があった。紹介がされた。終始リラックスした雰囲気の中で、様々な情報交換が活発に行われた。最後に川窪副センター長より、研究者間の交流がより活発になることを期待する旨の挨拶があり、閉会となった。

歓談する参加者

JSPSサマープログラム　プレオリエンテーション開催

参加者達との集合写真

4月25日に2016年度JSPSサマープログラムの参加者を対象に渡航前オリエンテーションを開催した。Dr. Andreas Göthenberg STINT事務局長の開会の挨拶に始まり、プレオリエンテーション参加者全員（2016年度参加者、2015年度参加者、STINT職員、ストックホルム研究連絡センター職員）による自己紹介、川窪副センター長によるサマープログラム概要及び渡航準備、熊本の地震に関する説明が行われた。続いて、2015年度参加者2名による経験談、質疑応答、阿久津センター長によるストックホルムセンターの紹介、Dr. Hans Pohl STINTプログラムディレクターによるSTINTの紹介が行われ、阿久津センター長による閉会の言葉をもってプログラムが終了した。プログラム終了後は参加者全員で一つのテーブルを囲んでランチをとり、和気藹々とした雰囲気の中で情報交換が活発に行われ、貴重なネットワーキングの場となった。

Japan Alumni and Researcher Assembly 2016に参加して

帯広畜産大学畜産衛生学研究部門　准教授　福田健二

眩しく輝く夏とくらべ，冬のデンマークは暗く寒い。2月の訪問を二つ返事で引き受けたのは，ひとえに昔の同僚に会えるからであった。

もう14年も前のことになるが，2002年5月からおよそ2年半，私はポスドクとしてデンマークに滞在した。当時，カールスバーグ研究所生化学部門に在籍していたBirte Svensson博士の下，オオムギのa-アミラーゼやタンパク質性アミラーゼインヒビターの生化学的解析を進めていたのである。その間，筆頭著者として出すことができた論文は一報のみ。失敗に終わる実験も多かった。ただ，研究業績にならなくても，その後の研究者人生を左右する多くのことを学ぶことができた（と信じて帰国した）。

ポスドク時代の同僚の一人、Maher Abou Hachem博士とは，年に数回E-メールで連絡を取り合う仲である。私の勤務先に講師としてお招きしたこともあり，その際，拙宅にも泊まっていただいた。彼から「デンマークでの体験談をちょっと話してみないか」と誘われ，あまり詳しく内容を聞きもせず引き受けた結果，図らずもJSPSデンマーク同窓会のキックオフミーティングとして位置付けされるJapan Alumni and Researcher Assembly 2016で講演することになってしまった。結局，会合の趣旨を理解したうえで発表用のスライドをまとめることができたのは，行きの飛行機の中であった。

当日，私の出番は午後からであったため，午前中はカールスバーグ研究所からDTUに引っ越したSvensson教授のラボでセミナーをおこなった。研究テーマの一つである“宿主接着に関わる乳酸菌の細胞表層タンパク質”について，有益なディスカッションをすることができ，共同研究の糸口を見出すこともできた。午後，会場についてみると全面ガラス張りの大変に立派な，モダンなスペースであり，いささか緊張した。講演内容もこれまでに経験の無い類のものだったので，原稿を読みながら，ということにさせていただいた。“デンマークに滞在して研究をした理由”と題し，言ってみれば私の経験したトホホ話を中心に皆様のお耳汚しをしたわけであるが，会場の温かい雰囲気に救われたと，思い返せば冷や汗が出る。結局言いたかったのは，いかに人との出会いが大切か，ということだったのだが，うまく伝わっただろうか。講演後のレセプションでは，多くの日本の若者が現在デンマークで研鑽を積んでいることを知り，心強い思いをした。デンマーク同窓会が，日丁間における人的ネットワークの構築，研究交流発展の起爆剤となることを願ってやまない。

翌日，Svensson教授やHachem博士と共同研究の打ち合わせをおこなったが，さらに買い物にまで付き合っていただいた。ストロイエでひとしきり買い物を楽しんだ後，カフェで一時間以上話し込んだ。前夜，食事に招待して頂いた時もたくさん話したはずなのに，一向に話題は尽きることがなかった。ポスドクとして，海外経験で得られたものが何だったのか，ようやく理解できたような気がする。

福田准教授による講演

Svensson教授らとの夕食

ケニア・ビクトリア湖島嶼におけるマラリア撲滅プロジェクト

金子明カロリンスカ医科大学教授によるケニア・ビクトリア湖島嶼でのマラリア撲滅研究の取組みが、スウェーデン国営放送SVTの科学番組で紹介された。金子教授に同番組の解説記事を寄稿いただいた。

※同番組は以下のSVTウェブサイト（該当部分30:00~42:00）から視聴いただけます。
http://www.svtplay.se/video/7584080/vetenskapens-varld/vetenskapens-varld-avsnitt-11-1

カロリンスカ医科大学　教授　金子　明

2013年に、約43万7千人のアフリカの小児が5歳の誕生日を前にしてマラリアにより死亡したと推定される。島嶼は干渉研究に対して自然の実験系を提供する。我々は1991年以来、オセアニア・ヴァヌアツのアネイチュウム島にてマラリアを撲滅し、維持しうることを報告してきた[Kaneko A, et al. Lancet 2000]。本研究では、そのマラリア撲滅パッケージをケニア・ビクトリア湖地域に段階的に導入する計画であり、5島嶼のみならず湖岸本土人口も含む地域住民7万人においてマラリア撲滅が維持されうるかを検討して行く。このパッケージはアルテミシニン併用療法と少量プリマキンによる短期集団投薬（MDA）と長期的な住民主導の媒介蚊対策とサーベイランスから構成される。2016年1-3月にかけてオコデ島においてパイロット研究が開始されたが、今回紹介されたSVTのフイルムはその際撮影されたものである。

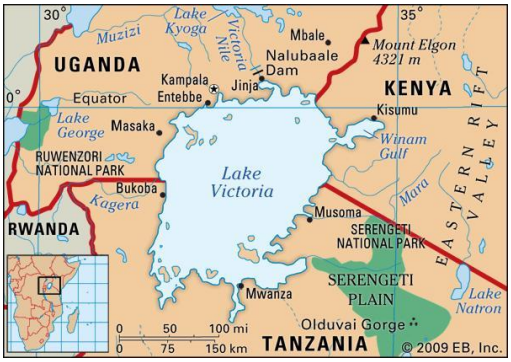
今後、我々はケニア側研究者とともに、MDAによるマラリア撲滅戦略導入により生じてくる住民における達成率、原虫薬剤耐性や原虫再入・伝播再興などの課題に対して検討を進めるとともに、そのインパクトを評価していく計画である。本研究は、撲滅パッケージをケニアにおける国家マラリア撲滅戦略として導入する際の重要なエビデンスと供に、多くの子供の命を救うための熱帯アフリカにおけるマラリア根絶に対するproof of conceptを提供する。

2016年8月には、第6回アフリカ開発会議（TICAD VI）が初めてアフリカの地、ケニアの首都ナイロビで開催される。この歴史的な瞬間において新たな国連持続可能な開発目標(SDGs)が掲げる「2030年までにマラリア流行を終焉させる」という地球規模の目標に向けて、本研究は日本発の試金石となりうるものである。

本プロジェクトは、長崎大学熱帯医学研究所ケニア拠点との行動研究を基盤として行われている。

金子教授（中央奥）とケニアの子どもたち
（カロリンスカ医科大学ウェブサイトより転載）

＜ビクトリア湖（Lake Victoria)＞
アフリカ東部、赤道直下にある淡水湖。ケニア・ウガンダ・タンザニアにまたがるアフリカ第一の大湖。面積69,000㎢
（大辞林より抜粋）



Encyclopædia Britannica, Inc.より転載

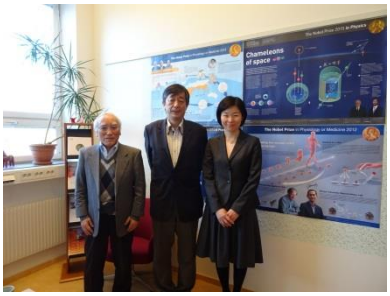
その他打合せ・来会等

スウェーデン王立工科大学訪問（3月10日）

阿久津センター長、川窪副センター長、村上国際協力員がスウェーデン王立工科大学を訪問し、日本の大学との交流の現状について説明を受け、サマースクール、ワークショップ、研究者交流について意見交換を行った。

成田吉弘 北海道大学ヘルシンキオフィス所長の来会（3月16日）

成田吉弘北海道大学ヘルシンキオフィス所長（工学研究院　教授）が当センターを訪問した。北海道大学の国際交流活動について情報提供があり、当センターからは北欧・バルト諸国におけるセンターの活動国際交流状況について情報提供し、意見交換を行った。



原泰史 政策研究大学院大学専門職の来会(3月18日）

原泰史政策研究大学院大学専門職が当センターを訪問した。ノーベル賞受賞者の研究に関する説明があり、研究環境について意見交換を行った。また、当センターより来瑞中の訪問先についてアドバイスを行った。

在スウェーデン日本国大使館訪問（4月5日）

4月にストックホルム研究連絡センターに着任した中兼優介国際協力員、北島江里子国際協力員と、5月末に産休・育休に入るタシママリカ現地職員が在スウェーデン日本大使館を訪問し、挨拶を行った。

鈴木大地カロリンスカ医科大学ポスドク研究員の来会（4月19日）

JSPS海外特別研究員プログラムにより今年4月からカロリンスカ医科大学脳科学研究科で研究中の鈴木大地氏が当センターを訪問した。翌週に行われる在スウェーデン日本人研究者の会を案内すると共に、スウェーデンの生活について情報提供を行った。

清水文一カロリンスカ医科大学客員研究員の来会（4月14日）

清水文一東洋大学大学院生命科学研究科教授が当センターを訪問した。清水教授は来瑞後間もなく、現在、カロリンスカ医科大学の医学生命科学・生命物理研究科の客員研究員として活動している。当センターより在スウェーデン日本人研究者の会やスウェーデンでの生活に関する情報提供を行った。

津本忠治次期センター長の来会（4月19－20日）

津本忠治**大阪大学名誉教授・理化学研究所脳科学総合研究センターサイエンスコーディネーター**が、次期ストックホルム研究連絡センター長として着任するにあたり、当センターを訪問した。阿久津センター長、川窪副センター長が当センターの活動内容について説明を行った。

Svante Lindqvist 王宮府長官表敬訪問（4月26日）

阿久津センター長、川窪副センター長がSvante Lindqvist王宮府長官を訪問し、カール16世グスタフ国王70歳の祝賀行事や学術関係行事について情報提供いただいた。また、当センターより、2015年に行われた日瑞学長会議のフォローアップについて情報提供を行った。

宮園浩平東京大学大学院医学系研究科長・医学部長の来会（5月3日）

宮園浩平 東京大学大学院医学系研究科長・医学部長が当センターを訪問した。今年9月26、27日に開催予定のKI Cancer Retreat（カロリンスカ医科大学主催、東京大学JSPSストックホルム研究連絡センター共催）の事前打ち合わせのため、宮園教授がカロリンスカ医科大学を訪問した。KIの担当者及び川窪副センター長との打ち合わせの後にセンターに来会いただき、センターが支援する内容に関して具体的に話し合った。

児玉紗梨日本航空ヘルシンキ営業所職員の来会（5月12日）

児玉紗梨 日本航空ヘルシンキ営業所職員が当センターを訪問した。先方からはヘルシンキ営業所総務セクションマネジャー交代に関する挨拶と、JAL航空便のメリット等について情報を提供いただいた。当センターからは、航空機の利用頻度などについて説明を行った。

コラム～スカンジナビア初、陸地でのヒラマサ養殖～

海外の日本食ブームが聞かれるようになって久しい。ストックホルム中心街を歩いてみても、同じ通りに複数の寿司屋を見かけることも少なくない。スウェーデンらしくオープン・カフェスタイルであったり、タイ料理とミックスされた店舗であるなど、一過性のブームから「Sushi」として現地化した印象を受ける。そのような背景もあってか、現地の産業にも影響を与えているようである。

例えば、隣国デンマークではスカンジナビアでは初となる、陸地でのヒラマサ養殖場をオープンさせる。ヒラマサはブリの仲間で高級魚として寿司のネタに使われている。操業会社のSashimi Royalは年間1,200トンの生産を予定しており、ユトランドの北西にある海岸沿いの町、ハンストルムに建設予定である。同施設は、従来の陸上水産施設の100倍もの水を使用するが、最新の環境技術を使用し99%の水をリサイクルすることで、周辺水域環境への影響を最小限にとどめる。この養殖事業により、約50種の仕事が町で生まれ、デンマークの水産物輸出に大きく貢献することになる。ヒラマサ1本70デンマーク クローネ（約1,150円）であり、フル稼働生産で年間300万デンマーククローネ（約5,000万円）の売上が見込まれる。

1デンマーク クローネ＝約16.5円

（参考）
CPH POST
http://cphpost.dk/news/business/denmark-to-open-scandinavias-first-land-based-plant-for-yellowtail-kingfish-farming.html

ストックホルムの街中には多くの寿司屋が立ち並ぶ（筆者撮影）

スウェーデン：豊島近教授及びPoul Nissen教授がグレゴリー・アミノフ賞を受賞

2015年9月10日、スウェーデン王立科学アカデミー（KVA）は、Poul Nissen オーフス大学教授（デンマーク）と豊島近東京大学教授の両氏を2016年グレゴリー・アミノフ賞受賞者に決定した。本賞は1979年に創設され、結晶学及びその関連分野において顕著な研究成果を挙げた研究者に対して贈られる。今回の受賞理由として、「ATPのエネルギーを利用し膜を隔ててイオンを輸送する機構の構造的理解に対する本質的貢献」が評価された。

2016年3月30日、同賞の記念シンポジウムが行われ、当センターからは阿久津センター長が出席した。豊島教授は「Structural iology of P-type ion translocating ATPases:towards complete understanding of the mechanism」と題した講演、また、Poul Nissen教授は「The structure and mechanism of transporters of the P-type ATPase family」と題した講演をそれぞれ行った。

翌31日には、ストックホルムコンサートホールで行われたKVA年次総会の場で、本賞の授賞式が開催され、当センターからは阿久津センター長、川窪副センター長が出席した。両教授には、KVA会長のChristina Moberg氏から賞が授与され、賞金として100,000スウェーデンクローナが贈られた。

＜グレゴリー・アミノフ賞とは＞

Gregori Aminoff氏（1883～1947）は芸術家と科学者の2つの経歴を持ち、1933年にスウェーデン王立科学アカデミー会員となった。同氏は、1918年にX線結晶学を、1930年には電子線回析学をそれぞれスウェーデン国内に導入したことで知られる。死後、彼の妻の意思により「グレゴリー・アミノフ教授記念基金」が1950年に設立された。同基金はKVAにより運営されている。

講演を行う豊島教授

授賞式の様子

KVAウェブサイト
http://www.kva.se/en/Prizes/Gregori-Aminoff-Prize/

スウェーデン：ノーベル賞2016　発表日程の決定

2016年のノーベル賞各賞の発表日程が決定し、ノーベル財団ホームページ上で公表された。
今回発表されたのは「生理学・医学」「物理学」「化学」「経済学」各賞の日程で、文学賞の日程は例年どおり後日発表される予定である。各賞の発表日程は以下のとおり。

生理学・医学賞
日時：10月3日（月）11:30
場所：カロリンスカ研究所

物理学賞
日時：10月4日（火）11:45
場所：スウェーデン王立科学アカデミー

化学賞
日時：10月5日（水）11:45
場所：スウェーデン王立科学アカデミー

平和賞
日時：10月7日（金）11:00
場所：ノルウェーノーベル委員会

アルフレッド・ノーベル記念経済学スウェーデン国立銀行賞（経済学賞）
日時：10月10日（月）11:45
場所：スウェーデン王立科学アカデミー

ノーベル財団ウェブサイト
http://www.nobelprize.org/nobel_prizes/about/prize_announcements/

スウェーデン：スウェーデンの主要3大学、ノーベルセンター内に応用研究施設設置を計画

ストックホルム市が臨海地区でのノーベルセンター建設を承認したことに伴い、カロリンスカ医科大学、ストックホルム大学、スウェーデン王立工科大学（KTH）の3大学は、応用研究のための新研究センターを同施設内に設置する計画を立てた。大学幹部およびノーベル財団関係者は、新研究センターはノーベルセンター内に置かれることで、国際的地位の最も高い施設の一つになるだろうと話す。また、活力に満ちた研究地域としてのストックホルム市の強みを増すことにつながり、オックスフォードやケンブリッジのような学術的に名高い都市と競う好機になるだろうと見ている。

（ノーベルセンターには反対の声も）
ノーベルセンター設置に対しては、建築デザインと建設場所を巡り、議論が起こっている。建築デザインについては、原案からは縮小したものとなった（イメージ図参照）。ノーベルセンターは2019年中に完成の予定。

ノーベルセンター完成イメージ写真
（ノーベル財団ウェブサイトより転載）

University World News
http://www.universityworldnews.com/article.php?story=20160427115446134
ノーベルセンターウェブサイト
http://www.nobelcenter.se/

スウェーデン：バーバラ・キャノン前スウェーデン王立科学アカデミー会長が旭日重光章を受章

日本政府は、平成28年春の外国人叙勲として、90名に対する叙勲を決定した。スウェーデンからは、バーバラ・キャノン前スウェーデン王立科学アカデミー会長が旭日重光章を受章することとなった。同氏は、スウェーデン王立科学アカデミー会長やストックホルム大学教授を歴任し、日本・スウェーデン間の科学技術交流及び相互理解の促進に寄与したとして、今回の受章となった。

在スウェーデン日本大使館ウェブサイト
http://www.se.emb-japan.go.jp/nihongo/news_160429.html

在スウェーデン日本大使館ウェブサイトより転載

スウェーデン：卒業生の雇用について

スウェーデンリサーチカウンシル（Vetenskapstradet, 以下VR）は、大学・専門学校の研究者の半数以上が、自身が博士号を取得した機関で雇用されていることを示す報告書を公表した。同機関はこの結果を受け不安を漏らす。「流動性の低さが心配である。スウェーデンの高等教育機関は戦略的リーダーシップの課題を踏まえて幅広い視野での雇用をすべきだ。」とSven Srafström VR事務局長は話す。

流動性の低さを是正するため、公開競争による国内での雇用システムを確立し、アカデミックポジションを競う際、流動性を高く評価すべきとVRは提唱している。

同報告によると、概して、大規模大学は内部登用率（博士号を取得した教育機関に雇用されていること）が高く60％以上であった。医学分野での外国での学位取得者は7%に留まる。報告によれば、理由の一つとして、スウェーデン国内の博士号取得者は修了時の年齢が比較的高く、すでに家庭を持っていることが挙げられている。

＜流動性が重要である理由＞

ヨーテボリ大学のBo Roshstein教授は次のように述べる。

「スウェーデン国内で研究・高等教育人材を雇用するため、ヨーテボリ大学の外部から来る優れた候補はほとんどいない。知の「インブリーディング」は男女平等、創造性のどちらにも良くなく、バランスの悪い長期依存につながり、集団的な思考を生み出す。」

ノルウェイ科学技術大学のJonas Persson氏は、「全ての研究者は国際的な経験をするべきだ。」と述べる。同氏は、ノルウェイ科学技術大学に勤める以前、英国、フィンランド、日本そしてスウェーデンで働いた経験がある。

「様々な文化ややり方を見てきた。様々な科学・教育への取組み方を見ることで、幅広い視野を持つことができた。流動性が重要である理由は、経験と他では決して得られない人々とのつながりを得ることができるからだ。国内に留まっていた場合に比べ論文を多く発表できないかも知れない。だが、物事を違った視点から良く見えるようになる。数値としては見えづらいかもしれないが、1人の人間としても、研究者としても成長でき、それは指導学生へのインスピレーションになる。」

ストックホルム大学が示した報告の新しい統計値によると、過去5年間で同大学に雇用された多くの教員は博士号を他大学で取得したか、他大学で雇用されたことを示している。

同大学のAstrid Söderbergh Widding 学長は「本学の方針は、教員職は国際的に募集され、開かれた競争によるものでなくてはならず、国内の候補を優先したり、外部資金を持つ者を求めてはならない。」と話す。

University World News
http://www.universityworldnews.com/article.php?story=20160317153639223

フィンランド:教育予算の削減について

フィンランドはサービス福祉インフラへの巨額の債務負担や低調な経済成長などのため、研究教育予算の削減を迫られている。サンニ・グランラーソン教育文化大臣は教育予算の大幅削減に対する学界からの強い批判に対し、「教授らの批判は正しい。」と自身のブログ上で認め、「教育研究予算の削減が良いニュースだとは誰も思っていない。誰だって予算削減の標的にされたくはないし、予算を削減せざるを得なかった側も、誰も嬉しくない」と綴った。

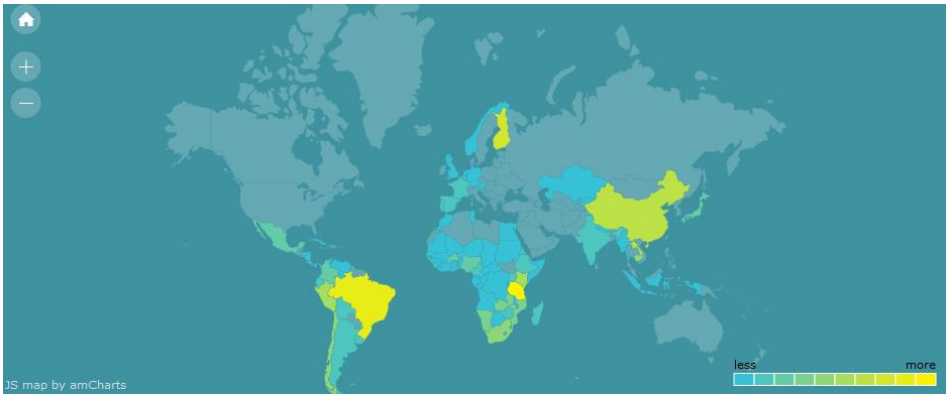
そして、「大学への予算割当は急落しないものの、実額で2009年度の水準まで落ち込むだろう。」と述べ、「大学には、フィンランドの逼迫した経済状況を分かって頂きたい。予算削減は全面的に行われているもので、敵意ではなく厳しい状況下での必要性によるものだ。」として、予算削減への理解を求めた。

Helsinki TIMES
http://www.helsinkitimes.fi/finland/finland-news/politics/13862-grahn-laasonen-no-one-else-hopes-they-ll-be-targeted-by-cuts.html

フィンランド:FinCEAL Plus INFOBANK機能について

FinCEAL Plusは、フィンランド教育文化省が行っている二国間研究協力事業である。当事業は、アフリカ、アジア、ラテンアメリカ、カリブ海地域と共に活動するフィンランドの研究者のネットワーク化と二国間研究協力を強めることで、同地域との二国間政策対話への影響力を強めることを目的としている。

同事業ではInfobankと呼ばれるデータベースを構築しており、フィンランドと各国間における研究情報を地域・国、年代、キーワードで検索すると共に、登録することができる。また、サイト上のマップを通じ、同国と各国間の研究事業数を俯瞰することができる。現在150件ほどの研究情報が登録されている。



研究事業数によって国毎に色分けがされている。
各国をクリックするとこれまでの研究課題一覧が確認できる。(Infobankウェブサイトより転載)

FinCEAL Plusウェブサイト
http://www.unipid.fi/en/page/157/
Infobank ウェブサイト
http://unipid.fi/infobank/

ノルウェー：日諾間でアルミ合金における共同研究教育事業締結

3月15日、駐日ノルウェー王国大使館にて、日諾アルミ合金研究教育協力と冠された3年間の国際共同事業（INTPART*）が調印された。本取組は、両国の大学・研究機関と企業が協力し、教育 - 研究 - ビジネス（ナレッジトライアングル）の連携を推進することを目的としており、共同ワークショップ、共同研究、研究者・学生の交流を行う。参加機関は富山大学大学院理工学研究部（工学）、東京工業大学大学院理工学研究科工学系、Hydro Aluminum、SINTEF Materials and Chemistry、ノルウェー科学技術大学の5機関。同日、調印式に合わせてワークショップが東京工業大学で開催され、各機関から110名の学生が参加した。

NorAlmuniJapan ウェブサイト
http://japan.noralumni.no/japan-norway-collaboration-aluminum-alloys-connecting-education-research/

各大学から集まる学生
（NorAlumni Japanウェブサイトより転載）

*INTPART：International Partnerships for Excellent Education and Researchの略称。二国間及び多国間の共同研究や交流を促進するパートナー間での活動を支援するプログラム。The Research Council of Norway、Norwegian Center for International Cooperation in Education (SIU) と共同で、日本を含む 8 か国（日本、ブラジル、カナダ、インド、中国、ロシア、南アフリカ、アメリカ）との間で実施される。

INTPARTウェブサイト
http://www.forskningsradet.no/prognett-internasjonale-stipend/Homepage/1224066982949
http://www.forskningsradet.no/en/Funding/INTPART/1254007331831

デンマーク：デンマーク工科大学（DTU）における廃水分析プロジェクト

世界保健機関（WHO）との協力により、デンマーク工科大学（DTU）は世界中の廃水の分析を含めた新規プロジェクトを発足させた。 COMPAREと題された本プロジェクトは、全人類の体内にどれだけの病原性微生物と耐性バクテリアがいるかを明らかにすることを目指している。「本プロジェクトで、迅速かつ比較的入手しやすい世界中の大量のデータ生成法の実現可能性を明らかにしたい。このプロジェクトが病気監視におけるパラダイム・シフトへの道を開いてくれれば」とFrank Møller Aarestrup DTU教授は話す。研究結果は、新監視システムの開発につながり、感染症の発見・予防や耐性バクテリア・ウイルス・寄生生物への対策に重要な情報が提供できる可能性を持つ。

（補足）
WHOによると、5800万人の年間死亡者のうち、4人に1人が感染症によるものとされる。現状、病気の蔓延と感染確率に関する入手可能情報には限りがあるが、今回のDTUのプロジェクトにより、世界70か国からの廃水が分析される。この分析データが将来的にエボラウイルスのような耐性バクテリアへの対策に使われる可能性がある。

CPHpostウェブサイト
http://cphpost.dk/news/dtu-analysing-worlds-waste-water.html

"KI Bladet" ~2016 NO.1&2~

ストックホルム研究連絡センターがオフィスを置くカロリンスカ医科大学（Karolinska Institutet)では、"KI Bladet"という学内誌を発行しています。誌上で提供されている内容の一部を紹介いたします。
KI Bladet http://ki.se/nyheter/ki-bladet-karolinska-institutets-personaltidning

学長代理の就任について

2016年2月13日付けでAnders Hamsten学長が辞任したことにより、次期学長が選出されるまでの間、Karin Dahlman Wright氏が学長代理として就任することとなった。
ハムステン前学長辞任に至る経緯と今後の方針は"KI Bladet"に述べられている。

（参照URL）
KI Bladet 2016 Nummer1 https://issuu.com/karolinska_institutet/docs/kibladet_1_2016_low

KI Bladet 2016 Nummer2 https://issuu.com/karolinska_institutet/docs/kibladet_2_2016_low

KIのイノベーションプラン

Alexander von Gabain学長補佐は、研究アイデアを発展させ実現と利用可能な研究資源を活用する方法を検討している人々のための単一拠点を創設したいと考えている。しかし、カロリンスカ医科大学のイノベーションシステムに関わる方法は、依然として多様である。
学生や研究者を対象として、Unit for Bioentreprenerushi Unit(UBE)にイノベーションと起業家精神を養成するトレーニングがあり、修士・博士レベルの学生でも、利用できる。イノベーションオフィス内には、計画の進め方について助言できる専門家やサポートスタッフがいる。
KI Science Parkは研究施設の貸し出しや関連ネットワークの提供を行っており、他方、KI Innovationは研究結果の商品化を望む研究者達のための場となっている。また、政府とカロリンスカ医科大学経営陣は研究関連法案の制定、イノベーション戦略や、その他の施策を通じて、イノベーションの促進を図っている。

イベント予定

セミナー・シンポジウムの開催について随時ホームページでお知らせしています。ストックホルムセンターHPをご覧ください。最新情報をご希望の方は以下URLから登録してください。
http://www.jsps-sto.com/contact.aspx

2016年度第1回KVA-JSPSセミナーの開催

スウェーデン王立科学アカデミー（KVA）とJSPSストックホルム研究連絡センターの共催で、KVA-JSPSセミナーが開催されます。

日　程　：2016年6月7日（火）ストックホルム大学 2016年6月8日（水）SciLifeLab
講演者　：濡木　理　東京大学大学院理学系研究科教授

事業のご案内

二国間交流事業（共同研究・セミナー）

本事業は、個々の研究者交流を発展させた二国間の研究チームの持続的ネットワーク形成を目指し、我が国の大学等の優れた研究者（若手研究者を含む）が相手国の研究者と協力して行う共同研究・セミナーの実施に要する経費を支援します。

http://www.jsps.go.jp/j-bilat/semina/jrss.html （日本語版）
http://www.jsps.go.jp/english/e-bilat/index.html （英語版）

外国人研究者招へい事業
（Fellowship Programs for Overseas Researchers）

本事業は、諸外国の優秀な研究者を招へいし、我が国の研究者との共同研究、討議、意見交換等を行う機会を提供することにより、外国人研究者の研究の進展を支援すると同時に、外国人研究者との研究協力関係を通じて、我が国の学術研究の推進及び国際化の進展を図ることを目的とした事業です。

平成29年度採用分募集要項をJSPSのHPにて公開中です。

http://www.jsps.go.jp/j-fpo/index.html （日本語版）
http://www.jsps.go.jp/english/e-fpo/index.html （英語版）

その他

カロリンスカ医科大学（Karolinska Institutet) 同窓会 会員募集

KIでは過去・現在問わず、在籍されていた方々のためにKI Alumni & Friendsを設立し、様々なイベントの企画、メールマガジンによる情報提供を行っています。KIに在籍した事があり同窓会に関心がある方は是非以下のホームページを御覧ください。

http://ki.se/en/collaboration/ki-alumni-and-friends

JSPS Stockholm Newsletterの定期購読について

ニュースレターの定期購読を希望される場合、1. 氏名、2. 所属機関・部署、3. メールアドレスを jsps-sto@jsps-sto.com までお送りください。電子メールにて配信します。

表紙写真：ガムラスタン（旧市街）の雑貨店
ストックホルムには多くの雑貨店がある。表紙写真は銅製品のアンティーク商品を扱っている店舗。所狭しと置かれた食器や鍋類が訪れる客の目を惹く。
（撮影　中兼　優介）

JSPS Stockholm Newsletter　第50号

編集長：川窪　百合子

編　集：中兼　優介

発行日：**2016年5月20日**

発行元：日本学術振興会ストックホルム研究連絡センター

連絡先：**JSPS Stockholm Office, Retzius väg 3, 171 65 Solna, Sweden**

Phone: +46（0）8 5248 4561

Website: http://www.jsps-sto.com/　E-mail: jsps-sto@jsps-sto.com